

雑司が谷旧宣教師館だより

第58号

2016年9月20日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0031 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5 TEL/FAX 03-3985-4081

リニューアルオープン記念イベント1

～「大塚・雑司が谷 春の歴史的建造物めぐり」～

2016年5月28日(土)、雑司が谷旧宣教師館のリニューアルオープンを記念して、「大塚・雑司が谷 春の歴史的建造物めぐり」と題した文化財講座を開催しました。今回の講座では、大規模修繕を終えた旧宣教師館の館内ツアーとともに、東池袋五丁目に所在する区指定文化財「旧鈴木家住宅」(2017年度に「(仮称)鈴木信太郎記念館」としてオープン予定)の見学会を行いました。

当日はJR大塚駅に集合し、北口駅前には所在する旧白木屋(現大塚ビル)の外観見学からスタートしました。旧白木屋は、日本橋白木屋の大塚分店として1937(昭和12)年5月に竣工しましたが、1944年、建物が当局に接收されたため西巢鴨へ移転しました。建物は、1945年4月13日の城北大空襲によって被災しますが、その後、大規模な補修・増築工事が施されて現在まで使用されており、この日は空襲直後の写真などから当時の風景に思いを巡らせました。

地下鉄丸の内線新大塚駅に向かって少し傾斜をのぼると、書斎棟、茶の間・ホール棟、座敷棟の三棟からなる旧鈴木家住宅に到着。ここでは、記念館開設担当職員による解説を聞き、庭園から住宅の外観を見学しました。その後、坂下通りから開運坂をのぼり、豊島ヶ岡御陵を経て雑司が谷へ。旧宣教師館では、大規模修繕の指導を担当した伝統技法研究会の角野茂勝さんによる館内ツアーが行われ、旧宣教師館の建築的特徴や修繕時の話などわかりやすく解説していただきました。

JR大塚駅から旧宣教師館までの行程では、豊島区立郷土資料館の学芸員が、豊島区の地理的特徴をわかりやすく解説しました。地形のつくりだす高低差や、それを利用したインフラ整備、すでに暗渠化した谷端川・水窪川の痕跡を歩きながら確認しました。



旧鈴木家住宅の解説を行う「(仮称)鈴木信太郎記念館」開設担当職員の古賀さん(学芸研究員)と木下さん(生涯学習指導員)。



旧鈴木家住宅座敷棟前で談笑する参加者。この座敷棟は明治20年代の建築で1948年に現埼玉県春日部市の鈴木本家から移築したものです。

角野茂勝さんによる旧宣教師館館内ツアー。旧宣教師館の天井には、どんな秘密が隠されているのでしょうか?答えは、旧宣教師館にすればわかります。



日本の夏、マッケーレブの夏

「今年の夏は大変暑くなります」。夏の天気予報では、この言葉をよく聞きます。また、「猛暑」、時には「酷暑」などという表現もされます。「最高気温 38 度」など、気温が体温より高くなることも珍しくありません。昔のことをよく知る人々のなかには、「昔はこんなに暑くなかった」と感じる方も多いようです。気象情報などで、海面水温が上昇する「エルニーニョ現象」や、近年では、太平洋赤道海面水温が下降する「ラニーニャ現象」など、いずれも異常気象を引き起こす可能性のある現象を表す用語が伝えられていることも、近年の夏の暑さを「異常」なものとして意識させるのかもしれませんが。

では、マッケーレブが来日した頃の日本の夏は、どのようなものだったのでしょうか。マッケーレブが雑司が谷に居を構えたのは、1907（明治 40）年のことです。ちょうど同じ年、早稲田大学英文科を卒業した秋田雨雀は、高田町大字雑司ヶ谷町 22（現在の雑司が谷 3-22）、鬼子母神と、後の墓所となる本納寺の中間にある木造二階家に住んでいました。この時、雨雀 24 歳。マッケーレブは 46 歳でした。

雨雀は、後年の夏の様子をこう記しています。「暑い。非常に暑い。85 度（華氏（かし）=F）以上らしい^{※1}」。雨雀の日記は、現在、大正 4 年 2 月以降から確認できますが、時折温度が記されます。85° F を摂氏（せっし）=C に換算すると、約 28～30° C、日記によれば、雨雀は、80° F（26° C 前後）以上になると「暑い」と記していますが、夜は比較的過ごしやすかったようです。今の気温からすれば少し低くも感じます。しかし、「新三種の神器（3C）」のひとつであったクーラーが量産され、一般家庭に普及するのは 1960 年代半ば以降のことです。それ以前は、夏の暑さは扇風機と団扇（うちわ）でしのいでいたのですから、暑いと感じても無理はありません。

雨雀はよく外出をしますが、現代と比べると徒歩による移動距離が多いため、当時の人々の運動量の多さも関係しているのかもしれませんが。出かける折には、暑さをしのぐために、かたびら（麻の単衣の着物）を着て外出しています^{※2}。こうした状況からか、雨雀はよく入浴しており、多いときには日に 3 回も入浴したと記しています^{※3}。また、アイスクリームを食べたり、喫茶店に入ったりしています。

雨雀の夏の過ごし方は、当時の日本人のそれと大きく変わらないでしょう。では、マッケーレブは、どのように過ごしたのでしょうか。1890（明治 23）年に来日したドイツ人宣教師カール・ムンチンガーは、日本の気候を次のように表現しています。

「気候も悪くない。ちょっと夏が暑すぎて赤道直下並みなので、軽い白い衣服で開けて着られるものを身につける。冬もちょっと西洋人向きではない。・・・特に 6 月・7 月の雨季はひどい。空気がそれだけ湿気をはらんでいるので、塩は溶けるし、革製品、長靴、手袋は数時間のうちにカビに覆われてしまう。・・・^{※4}」ここからは、西洋人にとって、日本の気候は悪くないが、過ごしよいものではなかったことがわかります。では、彼らはどのように日本の夏を過ごしたのでしょうか。

明治期に来日した外国人の夏の過ごし方、それは避暑地での生活でした。避暑地といえば軽井沢を連想しますが、1870 年頃には、横浜の外国人居留地に近い箱根や日光、中禅寺湖畔が避暑地として注目されていました。軽井沢は、江戸期を通じて中山道の宿場町として栄えましたが、幕末の参勤交代の廃止や、主要街道が中山道から碓氷新道へ移ったことから交通の要衝としての性格は失われており、その様子は「家は残らず朽ちかけて」と表現されています^{※5}。また浅間山の噴火による火山性堆積物の影響から土地が痩せていたため、農業による生産性は低い土地でした。しかし、1886（明治 19）年、こうした冷涼な高原の特性に注目し、避暑地として見出したのがイギリス人宣教師アレクサンダー・クロフト・ショウでした。7 年後には上野から直通の鉄道が開通したこともあり、地元住民などの日本人によって愛宕山の南麓は別荘地として開発され、外国人に分譲されていきます。1890 年代後半になると東京の教会や学校に関わる宣教師が別荘を所有し、避暑地としての性格を強め、明治末年以降は、日本人上流階級の避暑地としても人気となりました。

このように、近代の軽井沢は、宣教師たちによって避暑地が形成され、日本人が西洋文化を吸収する場ともなっていました。軽井沢には同じ教派だけではなく、超教派の宣教師が集まり、布教に関する会議や情報交換が行われたため、1897年には超教派の教会ユニオン・チャーチ（軽井沢合同基督教会）が設立されました。ところで、当館の調査では、マッケレーブも軽井沢を訪れていたことがわかっています。1933（昭和8）年、ユニオン・チャーチで開催された夏の合同教会記念集会の際に撮影された集合写真には、マッケレーブが写っています^{注6}。マッケレーブは、1934年に軽井沢の愛宕山の土地を借用しており、夏には軽井沢を訪れていました^{注7}。その後、1941年に離日するときに、マッケレーブは軽井沢の家を、日本に残る女性宣教師アンドリュースのために残したと伝えられます^{注8}。この家が、先ほどの土地に建てたものか、新たに購入したものかはわかりません。けれども、マッケレーブも同時期の宣教師ら同様に、日本滞在中の夏を軽井沢で過ごしていたのでしょう。

注1 『秋田雨雀日記』大正8年8月23日条

注2 『秋田雨雀日記』大正6年7月3日条

注3 『秋田雨雀日記』大正8年7月8日条

注4 『ドイツ宣教師の見た明治社会』（新人物往来社、1987年）

注5 『英国公使夫人の見た明治日本』（淡交社、1988年）

注6 御茶の水キリストの教会のご教示による。

注7 『道しるべ』（第76号、1934年）

注8 『道しるべ』（第24号、1982年）雑司が谷住民のご教示による。

参考文献 佐藤大祐・斎藤功「明治・大正期の軽井沢における高原避暑地の形成と別荘所有者の返遷」（『歴史地理学』46-3、2004年）

変化朝顔でうちわを作りました！

江戸時代の夏の風物詩、浮世絵などから窺えるそれは、金魚と団扇（うちわ）、それに朝顔でした。江戸時代後期になると、突然変異による珍花奇花をつける変化（へんか）朝顔が江戸で流行します。雑司が谷旧宣教師館では、今年、この変化朝顔の栽培を試みました。そして、2016年8月20日（土）、変化朝顔を活用した親子体験教室「変化朝顔で、うちわをつくらう！！」を開催しました。

今年の夏は梅雨明けが遅かったためか、昨年に比べると朝顔の成長も遅れがちでした。加えて、開催日前日からの台風の影響で、せっかく咲いた花の多くが雨にうたれてしおれてしまう…といったハプニングもありました。当日はあいにくの雨でしたが、運よくいくつかの変化朝顔が咲き残っていました。

子どもたちは、好きな朝顔を選んで押し花を作り、色とりどりの和紙で飾りをつけ、個性豊かな江戸団扇を作りました。江戸団扇作りは、まず、厚めの和紙と竹の骨組みで土台を作り、押し花や和紙を配置します。子どもによって、選ぶ花や和紙の飾りかたは全く異なります。また土台となる団扇の上に、さらに色紙や柄物の和紙を貼ったものなど、個性豊かな作品が完成しました。

押し花づくりは、とても繊細な作業です。自分で選んだ朝顔の押し花を細心の注意をはらって、破れないようにそっと団扇の土台に配置していく横顔は、だれも真剣そのもの。完成したときの笑顔は、雨にもまけず、晴れやかでした。



リニューアルオープン記念イベント2

～「スプリング・コンサート」～

雑司が谷旧宣教師館の食堂には、1921（大正10年）前後に、西川安蔵というピアノ職人によって製造されたウェスタンピアノが展示されています。旧宣教師館では、このウェスタンピアノによるコンサートを行ってきました。2016年5月14日（土）、リニューアルオープンを記念して、スプリングコンサート「ウェスタンピアノとトロンボーンによるセッション」を開催しました。

トロンボーンといえばジャズを連想しますが、今回のコンサートではクラシックも演奏され、トロンボーン奏者の櫻井俊（たかし）さんによって、演奏曲の解説やトロンボーンの魅力がわかりやすく紹介されました。ピアノ奏者の兒玉千沙子さんによるショパンの調べ、荒川静香選手がトリノオリンピックで使用した「トゥーランドット」「ユー・レイズ・ミー・アップ」など耳なじみのある曲が流れ、ジャズの名曲「枯葉」が演奏されると、リズムをとる参加者もいました。

今回のコンサートでは、トロンボーンの音量にまけないよう、ウェスタンピアノの下前板を外して演奏したため、普段は見ることのできないウェスタンピアノの内部構造を見ることもできました。春の一日、トロンボーンによるクラシック演奏やジャズの調べとともにウェスタンピアノの音色が雑司が谷に響き渡りました。



ウェスタンピアノの下前板を外したところです。

今回のリニューアルでは、1階の食堂部分と居間部分をひと続きにして、コンサートや講座を行うイベント会場として広く使えるようにしました。



秋のイベント情報

オータムコンサート

日時：2016年10月2日（日）14:00～

場所：雑司が谷旧宣教師館 食堂ホール

演奏者



新原輝美さん（フルート）



大島真貴さん（ピアノ）

演奏曲

ドニゼッティ/ソナタ、ライネック/バラード

ピアソラ/リベルタンゴ

いずみたく/見上げてごらん夜の星を 他

文化財連続講座

（会場：雑司が谷旧宣教師館 食堂ホール）

① 「信仰空間としての雑司が谷」

講師：永村真氏（日本女子大学名誉教授）

日時：10月30日（日）14:00～15:30

② 「建築史から見た雑司が谷旧宣教師館」

講師：木下和也氏

（豊島区立郷土資料館生涯学習指導員）

日時：11月6日（日）14:00～15:30

③ 「教育紙芝居の成立と豊島」

講師：浅岡靖央氏（白百合女子大学教授）

日時：11月13日（日）14:00～15:30

♪申込みが必要です。詳細はお問合わせください♪

おばあちゃんのおはなし会

毎月第一土曜日、旧宣教師館児童図書コーナーで開催中

2016年10月1日/11月5日 14:00～14:30

♪いずれも参加費無料。「オータムコンサート」と「おはなし会」は事前申込み不要です。当日会場にお越しください♪♪

[文責 小山貴子（学芸研究員）]